

2025年日本国際博覧会 パビリオン・施設の紹介 (No.6)

シグネチャーパビリオン

EARTH MART (小山館)

【設計】隈研吾建築都市設計事務所・大成建設一級建築士事務所



茅葺屋根の連なりが集落が集う風景をつくる



約5m跳ね出した茅屋根で作る軒下空間



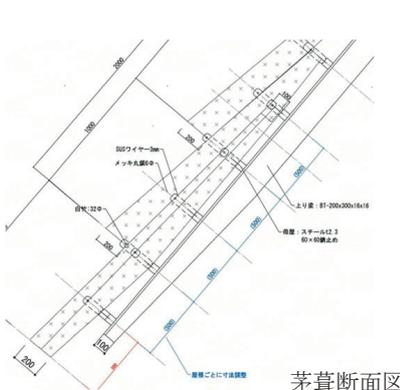
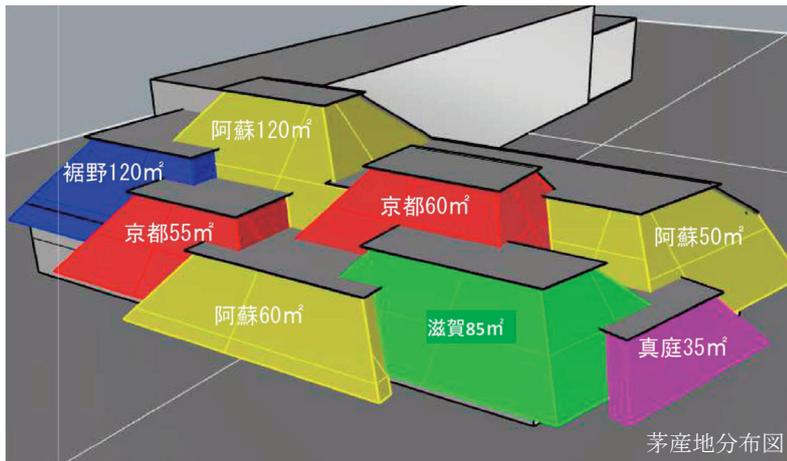
各産地で色味の異なる茅材



小さな屋根が集う豊かなルーフスケープ

写真協力：2025年日本国際博覧会協会

2025年日本国際博覧会 パビリオン・施設の紹介 (No.6)



今回の建物では加工の少ない段葺工法を採用しています。段葺を採用することで解体後の転用が容易になり、仮設建築物にふさわしい工法と考えます。各屋根は5つの産地から茅材を調達しています。産地の植生環境の違いにより茅のサイズや色味が変化し屋根毎に異なる表情を見せます。更にモックアップを製作し色味の変化の確認や止水性能の確認を行いました。

【パビリオンの概要】

2025年日本国際博覧会（大阪・関西万博）における、8つのシグネチャーパビリオンのうちの1つです。テーマの「いのちをつむぐ」を元に、放送作家の小山薫堂氏がプロデューサーを務めたEARTH MARTでは「空想のスーパーマーケット」を展示し、来場者と一緒に食の未来を考えます。建物は食と命の循環から着想し、転用可能な素材を使う「循環型建築」としました。食を育み受け継ぐ集落をイメージした形をしており、幾つも連なる屋根は日本の農家などに見られる茅葺としています。茅材は閉幕後にアップサイクルする計画としています。

【設計概要】

集落のように茅屋根が集合する外観は人々の食卓が集まる1つの村のようなルーフスケープを作り出します。昔からなじみがあり温かみのある茅と工業化が進んだ近代の鉄骨のダイナミックな空間を掛け合わせた日本初の茅葺建築です。約1500㎡の延べ床面積で1階部分が展示スペースとなっており、展示空間の最高高さは約11mとしています。茅葺屋根以外にも茅を練りこんだ外壁材や蛇籠に茅を入れた茅フェンスなど様々な茅の活用に取り組んでいます。茅材を積極的に使うことで茅を生育する山々の循環に寄与します。

当施設の確認検査及び建築技術安全審査は、(一財)日本建築総合試験所が実施しました。